図 書 紹 介・New publications

Frogfishes of the World. Systematics, Zoogeography, and Behavioral Ecology. Theodore W. Pietsch and David B. Grobecker. 1987. Stanford University Press, xxii+420 pp., 56 pls. $67.50

海底にジッとして，吻端の皮弁を巧みに動かし，近付いてきた小魚などを一呑みにしてしまうイザリウオの仲間に，誰しも一度は関心を抱かれたことと思う．この度，チョウチンアンコウ類の分類学的研究に優れた業績をあげている T. Pietsch 博士が D. B. Grobecker 博士と共に，チョウチンアンコウ類と近縁で，特異な進化を遂げたイザリウオ科魚類 (Antennariidae) についての非常に興味深いモノグラフを出版したのでここに紹介する．

本書の構成は7章からなり，豊富な図版とカラーの生態写真が彩りを添えている．第 1 章から第 6 章までを T. Piesch が，第 7 章を主として D. B. Grobecker が担当している．

第1章では，過去におけるイザリウオ科魚類の研究の歴史が紹介され，第2章で材料と方法の説明がなされている．アンコウ目魚類は，保存状態により体型が著しく変化するために，他の一般的な魚類に通常行えるような測定は不可能である．そのため，有効な分類形質に乏しく，非常に分類の難しい分類群である．イザリウオ科魚類とてその例外ではなく，本書では，擬餌状体 (esca)，皮下刺，尾柄の有無，鰭条数および体色等を用いて分類を行っている．分類形質に関しては，第3章において詳細な説明が行われている．各種の記載は第4章で行われ，世界産のイザリウオ科魚類は 12 属 41 種に分類されている．最も種類数の多いベニイザリウオ属 (*Antennarius*; 24 種) を，さらに 6 個の種群に分けている点が注目される．ここに掲載されているイザリウオ科の属及びベニイザリウオ属の種群の検索表には，それぞれの特徴を簡潔に示した線画が添えてあり，非常にわかりやすい．今後このような検索表が多数出現することを期待したい．

第5章と第6章では，本科魚類の系統と生物地理がそれぞれ論じられている．分枝分類学的手法を用いて，まずアンコウ目の亜目の系統類縁関係を，次に，ベニイザリウオ属の各種群内の種間の系統類縁関係を論じているが，イザリウオ科内の属間の類縁関係を構築するに至っていない点が残念である．また，著者自身も認めている所であるが，種類によっては標本の個体数と生態的データが少ないために，本科魚類の生物地理に関しては，解明すべき点がまだ多く残されていることは否めない．

本書の最大の特長は，行動生態を説いた第7章にあると言えよう．とかく形態学的な内容のみに片寄ったモノグラフが多い中で，イザリウオ科の特異な摂餌生態，四足歩行等に関する著者らのオリジナルな研究成果は，本書を読物としても大変興味深いものにしている．

本書は特化が著しいが故に分類が難しく，分類学者に敬遠されがちだったイザリウオ科魚類の分類を整理しただけでなく，イザリウオ科といった魚類の特化群の生態全体に関する総合的な業績として注目されるべき一冊である．　(猿渡敏郎 Toshiro Saruwatari)

会 員 通 信・News and comments

ロバート・ギブス博士のご逝去を悼む
Obituary of Dr. Robert H. Gibbs, Jr. 1929-1988.

4 月の魚類学会出席のための上京から帰って一息ついているところへ Dr. Bruce Collette から一通の便りが届いた．それは Dr. Gibbs の 4 月 3 日朝の急な肺癌死を知らせるもので，文面には Bruce 自身の全く信じられないと言う感じが溢れていて，「彼は死の一週間前の日曜日に病院を脱け出して，スミソニアンの研究室に来て仕事をしていた」とあった．それは私が 1981 年にスミソニアンに滞在した当時，土・日曜日でも早朝テニスの後，昼前には必ず研究室で仕事をしていた Bob の姿と二重写しになって，私の脳裏に焼きついて離れなくなってしまった．すぐさま追悼文を書こうと思ったが，どうしても筆が進まなかった．ちょうどこの 3 月頃，文部省の（在外）研究員としてスミソニアンに滞在していた北大の仲谷一宏氏から「昨年暮から Bob が肺癌のために入院して，容態は良くなくて，医師の話ではあと数年の余命だろう」とのことを伝える手紙をもらった矢先で，そのうちお見舞に行かねばと思っていたので，入院以来 3 ヶ月余での他界はあまりにも早すぎて今でも信じられない．

Dr. Robert H. Gibbs, Jr. は 1929 年 6 月 30 日にコネティカット州ニューロンドンに海軍士官の長男として

思い出の中の Bob

生まれた．御尊父は現在もマイアミに御健在で，後に准将まで昇進された方である．そのため「少年時代には海軍基地のある東部の町々を転々とした」と Bob 自身が話してくれたことがある．長じてコーネル大学に入学し，そこで博士号も得て (1955 年)，そこでは David Starr Jordan に因む "Jordani" と称する動物学同好会の中心的存在であった．Jordani はコーネル出身の秀れた魚類学者を輩出したことで有名で，Bruce も「そこで Bob に初めて出会った」と語っているように，それが Bob と Bruce の終世変わらぬ友情の始めとなった．1955 年以降 1963 年まで，Bob はニューヨーク州立大学，ウッズホール海洋研究所およびボストン大学で教育と研究に専念し，この間にまだコーネル大学の大学院生だった Bruce を自分の研究費によって研究助手に雇いシイラ類やマグロ類の研究に着手した．

1960 年代初頭に Bruce がコーネル大学で博士号を得て，スミソニアン研究所自然史博物館附属の国立海洋漁業庁分類研究所に職を得ると，今度は逆に Bruce が研究費をとり，Bob と共同で本格的にマグロ類の研究に取り組み，後年有名な 2 人の共著 "Comparative anatomy and systematics of the tunas genus *Thunnus* (1967)"—この研究によって商業漁業庁とスミソニアンから表彰された—を生み出した．この研究が縁で Bob は 1963 年にスミソニアン研究所自然史博物館に移り，亡くなるまでの 25 年間を魚類部門での研究と運営に邁進した．その間にロードアイランド大学とジョージワシントン大学の adjunct professor として，4 名の学生 (Drs. R. H. Goodyear, B. J. Zahuranec, C. Karnella, M. J. Keene) の博士取得のための指導をし，主査を勤めた．

Bob は少年の頃から山野や海岸へ出かけて自然に親しみ，研究室にじっと閉じこもるだけではなく永年に亘り世界中の多くの博物館への訪問研究を重ねたり，Anton Brunn, Eltanin, Gilliss, Discovery, Albatross, Oregon, Caryn, Delaware, Walther Herwig, Anton Dohrn など数多くの高名な調査船の航海や Alvin や Johnson Sea-Link などの潜水艇による調査にも度々参加したことは特筆に値する．

私が Bob と最初に知り合ったのは 1966 年夏に東京で開催された太平洋学術会議の折で，それがきっかけとなり，1981 年には私を Smithsonian Postdoctoral Fellow として自然史博物館魚類部に招いてくれた．この会議で Bob と Bruce の他 Dr. Hubbs, Dr. Gosline, Dr. Rosenblatt, Dr. R. Miller, Dr. Rass などのそうそうたる魚類学者達にお目にかかることができたが，魚類学の道に足を踏み入れたばかりの私には，はるか別世界の出来事のようだった．

1966 年当時，私はまだ大学院生で，松原喜代松教授と岩井 保講師の指導のもとに "マグロ類の分類学的研究" に従事していた．東京にやって来た Bob と Bruce も当時マグロ類の研究を精力的に進めていたので，彼らと我々の関係はいわばお互いに好敵手の間柄だった．東京でマグロ類の分類に関して，両者の意見を比較検討したところ，当時百数十を数えていたマグロ類の nominal species は約 7 種に整理できるところまで一致した．ただミナミマグロ *Thunnus maccoyii* を我々は種として認めたのだが，彼らはクロマグロ *Thunnus thynnus* と同種かあるいはその亜種ではないかと考えており，この点で両者の意見は合わなかったが，会議終了後 3 人で焼津魚市場へ行ってミナミマグロの実物を見たことによって，問題は簡単に解決した．すなわち，液浸標本のみを調べていた彼らはミナミマグロの尾柄隆起が黄色を呈することを見落していたことを認め，その場で我々の考えに同意し，最終的に現存のマグロ属 *Thunnus* は 7 種であることに落ちついた．

焼津訪問の後，清水 (遠洋水研，清水魚市場)，京都 (京大理学部および観光)，舞鶴 (京大水産学科，西舞鶴魚市場)，高知 (南海区水研，高知大学理学部，高知魚市場)，下関 (水産大学校)，福岡 (九州大学水産学科)，鹿児島 (鹿児島大学水産学部)，大阪 (近畿大学水産学科) へと約 4 週間に亘る 3 人 (後半，Bruce は日程の関係で帰国) の大旅行は本当に楽しく得るものの多い旅だった．本来なら私にとっては先生とも言うべき世界的魚類学者の 2 人が，私のような青二才を対等に扱い，拙い英語での私との議論を辛抱強く押し進めてくれた彼らの寛容と正直さとその "fair play" の精神に深く感銘を受けたことを昨日のことのように思い出す．猛暑の京都では連日休みなしの仕事と移動で，夏風邪をひいていた Bruce は元

気がなかったので宿に残して夕食後，京の夜に Bob と 2 人だけでくり出そうとしたら，寝ているはずの Bruce が我々の後を追いかけて来た．そして 3 人で呑んでいるうちに彼の風邪も退散してしまったということもあった．道中，終始日本式の旅館に泊って，しかもその当時の日本食のみで押し通していた彼らのことを思って，途中，舞鶴へ寄った時，岩井先生御夫妻がお宅でとびきり上等の厚いビーフステーキにより我々をもてなして下さった時の彼らのほっとした様な表情とステーキのおいしさは今もって忘れられない．各地でこの 3 人組を歓待して下さった松原喜代松，内田恵太郎，今井貞彦，中村広司，塚原　博，水戸　敏，石山礼蔵，上柳昭治，林　繁一，落合　明，岡村　収，尼岡邦夫，浅野博利，税所俊郎の諸先生のうち，松原，内田，今井，中村の諸先生がすでに鬼籍に入られた今，この 20 余年の年月の長さをつくづくと感ずる．余談だが，この旅行のために松原教授は案内役を勤めるようにと東京でポケットマネー 1 万円を貧乏学生の私にそっと渡された．そのお金でほぼ全旅程の旅費がまかなわれたと記憶している．

私のスミソニアン滞在中には度々お宅に呼んで下さり，奥様の Frigga はいつもおいしい手料理でもてなして下さった．我々の仮住いのアパートにもスミソニアンの仲間と一緒に度々御夫妻を招いて，ありあわせの和食を供したが，2 人とも日本の味がよく分り，日本食はおいしいし健康に良いので素晴しい等と言ってくれた．特にズワイガニのミソやイクラを食べて，これが最も美味しいと言ったのには恐れいった．また，Bob はホウレン草のゴマあえをひどく気に入り，どんぶり一杯食べたこともあった．ある晩，1966 年の日本の話しになった時，日本酒のオンザロックを片手に Bob は一瞬宙を見つめるような眼指になり「あの当時は絶好調期で研究もはかどり，実に楽しかった．また日本には行ってみたい」としみじみと考え深げに言った．その日本行きが 1985 年のインド・太平洋魚類学会議 (東京) で実現し，Bob と Frigga は 2 人揃って来日した．Bob はその時「Frigga に思い出深い美しい国，日本を見せるために来たよ」とひと言添えて照れたように笑った．東京での会議後のエクスカージョンにも後半から参加し最後の訪問者としてお 2 人は舞鶴の京大水産実験所を訪ねてくれた．数日を研究に費した後，残暑の厳しかった 8 月末の一日，天橋立方面へ一緒にドライブした．Frigga が Bob のお尻を押し押し登った成相山の奥の一番高い展望台から，遠くに雲の浮かぶ晩夏の天橋立をしばし眺めてから，Bob が「天橋立の意味は?」と聞くので「ladder to the heaven のような意味だよ」と言ったら，それを口の中でつぶやくようにくり返していた．再会を約束して西舞鶴駅で別れたのが，今はかなわぬことになろうとは思いもよらなかった．思い出は尽きないがここらで擱筆しなければならない．なお，Bob の未完の研究のうちの stomiatoids と Ocean Acre Project は Janet Gomon と Dick Goodyear に，トビウオ類を含むダツ目魚類は Bruce Collette と Nick Parin によって引き継がれることになっている．

スミソニアン研究所自然史博物館副館長の Dr. James C. Tyler が全職員に Dr. Gibbs の死去を伝えた文を最後に掲げて，偉大な魚類学者 Dr. Gibbs の御冥福を祈るとともに，残された Frigga 夫人と 4 人の御子様達の御多幸を切に願う．また，この小文を草するに当り種々の資料を送って下さった Dr. Tyler と Dr. Collette に深く感謝する．

TO　　: All Staff, NMNH
FROM : James C. Tyler
DATE : April 6, 1988

I deeply regret having to announce that Robert H. Gibbs, Jr., Curator, Division of Fishes, since 1963, and Chairman, Department of Vertebrate Zoology, 1972-77, esteemed colleague, and cherished friend of many in this Museum, died Easter Sunday, April 3, of lung cancer after a brief illness. As a fellow ichthyologist, I am personally saddened at his passing, and I know that I speak for all of you when I express to Bob's wife Frigga, his family, and his many colleagues the Museum's sorrow and profound sense of loss.

Bob Gibbs came to the Smithsonian after graduate school at Cornell University from which he received his Ph. D. in 1955, and several years of professorships at the State University of New York at Plattsburg and at Boston University.

Bob was a multifaceted scientist whose published works contributed toward our knowledge of dragonflies, frogs, birds, mammals, North American freshwater fishes, and especially during the past 25 years, deep-sea fishes of the world, of which he was an internationally recognized authority. At the time o-his death, his nomination as a Distinguished Fellow of the American Society of Ichthyologists and Herf petologists had been endorsed by 65 members of the Society and was about to be acted upon. This was only the third such nomination in the history of the Society.

Bob served on many of the most important committees in the Museum of Natural History, and was amongst the most foresighted of our staff to work for the introduction and use of computers in both collection management and research. A listing of his services to scientific societies, the national museum community, and conservation programs fills pages.

He was a person beloved by a great many and his loss will be felt deeply for years to come. Bob was a gentleman and a scholar, and all who knew him will miss his unflagging devotion to his science and his warm personality and wry humor.

Condolences may be sent to Mrs. Frigga Gibbs, 4017 Simms Drive, Kensington, Maryland 20895. In lieu of flowers, the family suggests memorial contributions be made to the Nature Conservancy, 1800 N. Kent Street, Arlington, Virginia 22209.

A memorial service will be held Thursday, April 14, at 2:30 p.m. in the Baird Auditorium, National Museum of Natural History.

(中村 泉 Izumi Nakamura)

末広恭雄先生を偲んで
Professor Yasuo Suyehiro, 1904-1988

生涯一時も無駄なく，魚わが友とした末広恭雄先生は，昭和 63 年 7 月 14 日享年 84 才でこの世を去られた．亡くなられる 1 年お会いすることもなかった．これは，末広さんが何時も口にされた，老いることなくこの世を去りたいとの思いからであった．そっと消え去りたい一念から親しい人とも会わずに，静かに逝去された．

明治 37 年のお生まれで，旧制八高，昭和 4 年に東京帝国大学農学部水産学科を卒業，その後農林省水産試験場に勤務，昭和 19 年東大南方自然科学研究所教授として母校に戻られ，昭和 29 年から東大農学部水産学第 4 講座を担当，昭和 40 年 3 月の退官までの 21 年間にわたって研究と後進教育をされた．その後日本大学水産学科で教鞭をとられ，昭和 42 年からは，京急油壺マリンパーク取締役館長を亡くなられるまで勤められた．

この水族館をこよなく愛された晩年でもあった．東京世田谷にあるご自宅から，62 年 10 月まで週 1～2 回来られ，私たちと仕事の話しを夢中になってされ，逗子までハイヤーを使い，横須賀線で品川まで帰途につかれる．何時も大きなカバンの中には原稿用紙が入っていた．車中では考えつかれた事を書きとめ乍らの帰途であった．生涯約 85 冊もの末広さん特有のわかり易い，無駄のない簡潔で，なお面白い文章により，魚への関心を一般の人々に興味深く普及された業績の大きさは，こんな努力の結果でもあった．

何故か末広先生とのご縁があって，この水族館建設にあたって，私を呼ばれ，ともに仕事をさせて頂いた．先生がプランナーであって私が運用と云った 2 人 3 脚が 20 年続いた．

熱心なクリスチャンであることが，先生と接し始めて直ぐにわかった．先生に一貫した処生基念を感じとったことがあった．如何なる場合にも人を裁かない「絶対愛」が必要だと云う基底が先生にはあった．キリストの教えに「私は罪人であるから，この人を裁くことは出来ない．誰れでもよいから，これまで一度も罪を犯したことのない人に裁きをまかせる」とある．人を裁かない愛情こそ，悪人と云われる人を美化する「唯一の途」としてご生存中のお顔があったように思われる．誠意をもった仕事に対しては叱られた事はなかったし，先生のお別れの会でテープを流した末広さん作曲になる「秋の子」のメロディーが出来上ったのではないかと思われる．静かな人柄を偲ばせる曲だと思う．また仕事への情熱は，東大の応援歌「足音高く」にその意気込みが感じられる．

お酒とタバコをこよなく愛された．晩年までサントリーレッドを愛され，日本酒は特級の冷酒であった．お酒のうまさを味わわれていた．

時に，奥様に知られない原稿料が入った時など，この 2 枚をもとに今夜はうまい酒を飲もうよとバーへ乗り込む．先ずは日本酒のお冷や，次はビール，席を立つとビールにウイスキーが注ぎ込まれてしまっている．茶目気の多い先生であった．飲んだ量の割りには，つい深酒となったことが思いだされる．東大同期の鯨研の大村秀雄先生の一節でも表現されている．「宿舎の庭の芝生で，夕食後コンパをやった．酒は高いから焼酎にした．一同車座になったところで，末広君が先生を呼びに行った．先生は石川 昌先生だったか，水と思ってぐっと呑まれたその瞬間の複雑な顔，先生には大変失礼したがと末広さんがその著書「魚わが友」(1976) に書かれている．」

がめつさも感じられた．シーラカンス解剖後，この肉を食べた事があった．刺身で食べたこの感想は「原始の

香りがする」と末広流のうまい表現だと感じた．

晩年「この世のエネルギーが一定のものだとすれば，私の死の瞬間に，母体を去った生命のエネルギーは，新たに誕生すべき何らかの生命に「転位」するものと私は思う．」としてこの世を去られた．コモロの海で，シーラカンスとなって，その生態を探索されておられるのであろうか．

(京急油壺マリンパーク　堤　俊夫 Toshio Tsutsumi)

檜山義夫先生を悼む
Professor Yoshio Hiyama, 1909-1988

本学会会員で東京大学名誉教授の檜山義夫博士は，昭和 63 年 7 月 21 日未明，腎不全のため逝去された．享年 79 歳であった．

先生は明治 42 年 4 月 1 日に東京でお生まれになり，東京高等学校から東京帝国大学農学部水産学科に進まれ，昭和 9 年にご卒業後同大学院に進学された．翌 10 年に大学院を中途退学して副手となられ，すぐに助手に任じられた．昭和 16 年に助教授，そして昭和 24 年に教授に昇進され，爾来昭和 44 年に定年退官されるまで水産学第一講座を担任された．この間，多数の優れた研究業績を残されたばかりか，故安田富士郎博士など多くの後進を育成された．また，日本学術会議会員および各種審議会や委員会の委員として，水産だけではなく，厚生，原子力，環境といった幅広い分野で活躍された．

先生の研究活動は，魚類分類学，魚類生態学，漁業学，水産資源学，そして放射生態学と極めて多方面に亘っており，それぞれの分野で主導的役割を果たされた．また，研究や教育の傍ら，魚拓をこよなく愛され，その作品は東海区水産研究所の業績C集「さかな」の表紙を飾っていたことは記憶に新しい．

先生のご研究の出発点は魚類分類学であった．在学中に故松原喜代松博士と共同で日本近海のホウボウ科魚類の研究を公にされた．また，ガンギエイ科のトビツカエイ，アオメエソ科のトモメヒカリなどの新種も記載された．さらに，故熊田頭四郎博士と「Marine fishes of the Pacific coast of Mexico」(1937, 日産水産研究所)，同じく「南洋食用水族図説」(1941, 日産水産研究所) を著わし，図鑑として高い評価を受けた．戦後，日産水産研究所に残されていた魚類の図版を基にして故安田富士郎博士と共著で出版した「日本水産魚譜」(1961, 内田老鶴圃) 及び「中部西南太平洋有用有毒魚類図鑑」(1972, 講談社)は著名である．南方性の有毒魚類に関する研究は，その名称，分類学的位置，形態ばかりか，有毒部位，毒性の強弱なども詳細に吟味考察して，後の南方域の有毒魚類調査の先駆けとなった．その報告書である「南洋有毒魚類調査報告」は現在でもこの分野で光彩を放っている．本研究は学術上も応用上も極めて貢献度が大であるとして，昭和 20 年 4 月に日本農学賞が授与された．

先生は魚類の生態についても多くの業績を残された．初期の研究成果であるハゼやギンポの産卵生態，イシダイの歯系発達の論文では先生の生き物に対する観察の鋭さが窺える．また，漁具に対する魚群の行動を実験的に確かめるといった研究も行い，その成果を「魚類実験生態論」(1947, 原林書院) に著わした．水産資源学的研究，特にマグロ類の系群識別に関する研究，マグロ類やアジ・サバ類の年齢と成長に関する研究，あるいは水産生物の放射能汚染に関する研究など，常に時代を先取りする研究を推進された．特に，昭和 29 年に社会問題となった放射能マグロについての研究，さらに環境放射能の生物に与える影響に関する研究は，先生が開拓された研究分野として記憶されねばならない．また，昭和 25 年以来 20 年間続けられた東京湾北部のマハゼ資源の研究は，後に〔江戸前のハゼを守る会〕の結成へとつながり，東京湾の環境保全を訴える資料の一部ともなった．

先生はこのように研究者，教育者として優れた足跡を残されたばかりではなく，オーガナイザーとしても類稀な才能を発揮された．その最たる例が昭和 41 年に開催された第 11 回太平洋学術会議であろう．日本で開催された最大規模の国際会議を成功裡に終らせ得たのも，総務幹事として全体を取り仕切った先生の熱意とオーガナイザーとしての資質を抜きには考えられない．昭和 60 年に本学会が主催した第 2 回太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議では顧問をお願いし，いろいろなご助言を頂いた．

ここに日本の魚類学の発展に寄与された先生のご逝去を悼み，謹んで先生のご冥福をお祈りする次第である．

(東京大学農学部水産学第一講座 Laboratory of Fisheries Biology, Faculty of Agriculture, University of Tokyo)

第 14 回欧州比較内分泌学者会議の紹介
14th Conference of European Comparative Endocrinologists (4-9 September, 1988, Salzburg, Austria)

この国際会議は，国際雑誌 General and Comparative Endocrinology の推進母体であり，会議で発表された論文の要旨はすべてこの雑誌に掲載される．日本からの参加者は毎回多くは無く，唯一人，前日本動物学会会長で本会会員でもある小林英司先生（全薬工業）がほとんど欠かさず出席しておられる．私は，来年5月にスペインの Malaga で開催予定の第 11 回国際比較内分泌シンポジウムに座長その他の役で会頭の A. Epple 教授 (Philadelphia) より，出席を要請されていることもあり，欧州の雰囲気を知ろうと Mozart 生誕の地 Salzburg へ出掛けてみた．

会場の Salzburg 大学自然科学部は，街はずれに独立に新設されて3年目という建物で，明るく機能的であった．参加国は 27，出席者は 370 名余，その外に同伴者もかなり目についた．主催国のオーストリアが最も多い (67 名) のは当然として，次いで隣国の西ドイツ (60)，フランス (44)，イタリア (33) の順で，共産圏諸国の参加者は少なかった．共産諸国の研究者は，なかなか旅費を出して貰えないのだと，口々に訴えていた．チョウザメ類の比較内分泌学的研究ですぐれた業績を挙げている A. Polenov 教授 (Leningrad) も欠席され，がっかりした．我が国からは，千葉　晃博士 (日本歯科大新潟) など7名にすぎなかった．演題数は，口演 180，ポスター119 で，計 299 題であるから，共著者があるということを考慮すると，参加者のほとんどが発表していることになる．

魚形動物に限っていうと，口演では頭索類 1，円口類 2，軟骨魚類 3，硬骨魚類 31 の計 37 題．ポスターは，軟骨魚類 4，硬骨魚類 31 題の計 35 題，総計 72 題 (余) あり，全体の 1/4 を占めることは注目されてよい．発表内容の紹介は多数にのぼるので避けるが，東大三崎臨海実験所でヌタウナギの生殖腺を研究したことのある地元の R. Patzner 博士は，地中海沿岸産のハゼ類とギンポ類の精巣，ことに精巣 (間質) 腺について組織化学と電顕によって比較検討を試みていた．彼や会頭の H. Adam 教授らは，真に動物好きな研究者であり，Patzner は H. Debelius の協力を得て，素晴らしい原色の生態写真を載せた "Partnerschaft im Meer" 120 頁 (1984) (Engelbert Pfriem Verlag) を出版している．この本には，J. E. Randall の序文が載っている．彼らは，Haus der Natur (Salzburg 中心街にある，海水水族館まで組み込まれた自然史博物館) の展示にまで貢献している．Salzburg への航空機待ち時間を利用して訪れた Frankfurt の Senckenberg 自然史博物館 (W. Klausewitz 教授がいる) とは一味異なった生き生きした博物館なので，いささか驚いた次第であった．

ところで，W. Bargmann 教授や夫君の E. Scharrer 教授と共に魚類の視床下部—下垂体系における神経内分泌系の発見と解明に顕著な業績を挙げた B. Scharrer 教授 (New York) へ，Salzburg 大学から名誉理学博士の学位が与えられた．贈呈式は会期2日目の9月5日に行われ，記念講演もあり，参会者一同によって祝福された．スウェーデンの Kristinberg 臨海実験所で，メクラウナギの習性や視床下部—下垂体系の組織学的研究を行った Adam 教授は機智に富み，洒落た司会と説明は好評であった．メクラウナギのこの部位の血管構築を，樹脂の鋳型によって詳細に研究した若手の A. Lametschwandtner 教授も，庶務幹事を務め，手際良く処理していた．

イクスカーションで Kremsmünster へ行く途中，思いもかけず山麓の川沿いにある小さな国立研究所で，シクリッド類などの行動学に関する一大業績により 1973 年度ノーベル医学生理学賞を受けた K. Lorenz 老教授 (歩行不自由) に会うことができ一人一人握手して近況を話し合った．Adam 教授の取り計らいと，ツアーの一行は皆感激した次第である．学会後，私が訳して講談社から刊行した "動物の比較細胞組織学" の著者 U. Welsch 教授と邦産カワヤツメ幼生の組織器官の発生研究につき打ち合わせるため，千葉と連れ立って München の解剖学教室を訪れた．見た目には豊かな森林で被われたババリア地方と思っていたのに，酸性雨などで，大分痛めつけられ，有尾両生類はほとんど姿を消し，実験材料にも事欠くという．この西独第3の大都会には，大規模な自然史博物館は無いが，理工学と技術中心の Deutsches Museum が有名である．

今回の会議で会った研究者の中には，魚類脳室壁に存在する髄液接触ニューロンの研究ですぐれた業績を挙げている B. Vigh, I. Vigh-Teichmann 夫妻 (Budapest) をはじめとし，10 月下旬に新潟へ来る人が何人かいた．International Symposium on Neurons and Paraneurons (新潟) に出席するためであり，再会を約して別れた．帰りの空路は，シベリアの大平原を眼下にして飛び

続けた．10 月中旬には，日・米・ソ・北鮮・韓・中国の学者が新潟へ集まり，「日本海国際会議—日本海の資源管理」が行われる．私も日本海の動物相について，一席演ずることになっているが，ヨーロッパは近くなったと感じた．学術交流を，大いに期待する次第である．

(本間義治 Yoshiharu Honma)

マツカサウオの蒲鉾

マツカサウオから蒲鉾ができるか? 鮮魚が必要量入手できないので実験したわけではないが，作れるか否かと問われると，蒲鉾を自作した経験とマツカサウオを解剖した経験から「できる」と確信している．しかし，この魚種を解説して「練製品の原料となる」と記述されると，事態は穏やかではなくなる．

いくつかの図鑑で，「マツカサウオが練製品の原料となる」との記載がなされてきた．このような解説に驚いた資源研究者が調査し，マツカサウオから蒲鉾を作るのは商業的に決して出来ることではなく，またそのような事実もないことを既に明らかにするとともに，いくつもの図鑑を経時的に比較して，高名な学者の誤りが引き写されてきた経過を明らかにした (庄島，1982)．にも拘わらず「つい最近発行されたばかりの高価な大図鑑を見ても，まさかと考えられる記述がひきつがれている」と，あきれかえっている (庄島，1987)．私には，「分類屋はいい加減なことを図鑑に書いている」といわれているように聞こえる．

かつては私自身が多少なりともマツカサウオを扱っていたが，マツカサウオの解説を書いたときには，「練製品の原料となる」ような内容は書けなかった．実学出身の者としては到底信じ難い内容であるし，マツカサウオの漁獲の状況からもそのようなことはないと考えたからである．さて，魚類図鑑が近年相ついで出版されており，それはそれで結構な事だと思う．だがその編集方針と内容については手放しで「結構」と言いかねるものもある．図鑑の編集方針によっては，専門外の魚の解説が担当者に割り当てられる場合もあるようである．このような場合にどうするのか? 大抵は何かの記載を引き写すのである．ここに，誤りがいつまでも正されないばかりか，再生産される根源がある．自らの経験から，忸怩たる思い大である．

自らの研究と観察のみでは与えられた分 (文?) 量と内容を埋められない場合や，端的に言うと自分がよく知らない魚の解説を書く場合には，どこからか引き写して埋草とする．自分が書いた解説文中の流通用語の読み方を聞かれて「知らない」と答えた先生がおられた．もはや現実とは合わない漁獲状況や，歴史的事実に過ぎないような利用形態が，記載されている事もある．分類の混同が整理された後でさえ，それ以前の記述が訂正されない場合もある．このような例は枚挙に暇がないであろう．社会的に権威や地位があると思われている学者の名前が監修者や執筆者として付されていると，一般の読者は事実として受け取ってしまう．研究者の最低の良心として，知らないことは書くべきではないのであろう．「図鑑屋」ならば稿料により努力の量と原稿の質を変えるのが professional の cost performance 追求のやり方かもしれない．しかし，漁獲状況を記述するように要請されて，時間と金をかけ担念に水試や水研の資料を調べて，up to date な漁獲状況を記載する若い人々がいる事実も充分承知している．

図鑑などでは出版社と編集者の意向が，内容と記載の量と質を大きく左右するのが現実である．解説を下請けに書かせるのはもはや一般的になってしまっている．原稿に手をいれてもその通りに直らない場合すらある．「高価な大図鑑」中でのマツカサウオの解説はこの例である．ある研究者から聞いた話では，とある出版社の人に文章や図版の引用で版権の問題が生じないようにしてくれと要請したら，「よその出版社もうちの本を写しているから，あまり連絡の必要はない」と答えたそうである．法治国家に生きる者としては，仰天するような回答である．もっともなかには「図版の転載を禁ず」と，暗に文章の引き写しを認めていて，思わず失笑を禁じ得ないようなクレジットのはいっている図鑑さえもある．

客観的事実をありのままに記載すれば，同じ内容になるのはいわば当然である．しかし，体裁を整えるための埋草が事実に反するとなると，かえって図鑑と解説者の評価をおとしめるものとなる．出版社や編集者の意向に抗しても，自らの研究と観察にのみ忠実であるべきか? 魚を英語では fish という．形容詞 fishy には「いかがわしい」とか「怪しげな」という意味がある．Fish の fishy な解説を避けるように充分注意したいものである．

ところで，マツカサウオの学名の正しい綴は *Monocentris japonicus* ではなく，*M. japonica* である．学名の変遷について正しくない記述がオカルト生物学ともいえる書籍 (荒俣，1982, pp. 323-324) に記述されているので，経過を若干詳述する．マツカサウオの原記載は Houttuyn が 1782 年に *Gasterosteus japonicus* として与えている (属名，種小名共に男性語尾で正しい綴字)．これとは独立に，Schneider が 1801 年にマツカサウオを *Monocentris carinata* として記載した (属名，種小名共に女性語尾で正しい綴字)．その後 Lacepède により

1802 年に *Lepisacanthus* 属が，Tilesius により 1809 年に *Ericius* 属がマツカサウオに提唱された．Cuvier は 1829 年にこれらが同一の魚であると認めると共に，*Monocentris* 属の独自性を認め，先取権を尊重し *Monocentris japonicus* として記述した．ところがここで，*Monocentris* が女性語尾を持つにも拘らず，男性語尾の種小名で記述してしまった．これ以後，連綿としてこの誤りが継承されてきたのである．キュビエの創設以来，ごく最近まで性の取扱を間違っていたという例は他にもある．単語に性があるという日本語とは全く異質な言語への忌避のみならず，「偉いさんが書いているのだから，まあ正しいのではないか．とくにフランス語はラテン語系の言語だ」という事大主義的な判断停止が，洋の東西を問わず意識の底を流れているようである．げに高名(この際，高名とは内容の正確さではなく，内容の量を意味すると理解されたい) な学者の誤りは尾を引くものである．ちなみに *Monocentris japonica* の綴で学名を表記したのは蒲原 (1955) が最初であると思われる．しかし，和文で書かれていた事と，*japonica* とする根拠が記述されなかったため，*japonicus* がこれ以後も国内外で優勢を占めた．近年国内では *japonica* が定着しているが，*Monocentris* は女性語尾をもつという指摘が英文でなされている (Stayskal, 1980) にも拘らず，諸外国ではいまだに *japonicus* が用いられている．

引 用 文 献

荒俣　宏．1982．大博物学時代．工作舎，東京，359 pp.

蒲原稔治．1955．原色魚類図鑑．保育社，東京，135 pp.

庄島洋一．1982．マツカサウオとかまぼこ．西海区水研ニュース，41: 5–9.

庄島洋一．1987．東シナ海域のマイワシ (3)　マイワシ近縁種 I．西海区水研ニュース，57: 2–7.

Stayskal, G. C. 1980. The grammer of family-group names as exemplified by those of fishes. Proc. Biol. Soc. Wash., 93 (1): 168–177.

(清水　長 Takeshi Shimizu)

The Occurrence of *Lampetra tridentatus* in the Northern Bering Sea

The previously known range of the Pacific lamprey, *Lampetra tridentatus*, was reported as St. Mathew's Is., Ak. (60°24′N, 172°42′W) by McPhail and Lindsey (1970). They did not give a citation for this record or specimen.

During an environmental survey conducted for American Smelt and Refining by the Institute of Marine Science, University of Alaska Fairbanks, I collected one specimen of *L. tridentatus* 7 miles southwest of Nome, Alaska (64°30′N, 165°25′W) during an otter

Fig. 1. *Lampetra tridentatus* collected off of Nome, Ak. in 1973 (UAM 1119). Photo credit Mr. Barry McWayne.

trawl sampling in 20 meters of water (Fig. 1). This location is approximately 162 miles northeast of St. Mathew's Is. In recent reports in the literature I have not seen reports of this species occurring in the region. The Pacific lamprey is more than likely found in this region in low numbers during periods when the region is influenced by warm water currents from the south. The specimen is deposited in the Univ. Alaska Museum (UAM 1119).

I would like to thank Ms. Nora Foster, Curator Aquatics Collection, Museum University of Alaska Fairbanks, for her assistance in obtaining the photograph and to Mr. Barry McWayne, Museum Photographer for taking the picture used in Fig. 1.

Literature cited

McPhail, J. D. and C. C. Lindsey. 1970. Freshwater fishes of northwestern Canada and Alaska. Fish. Res. Bd. Canada, Bull. 173, 381 pp.

(Kenneth D. Vogt)

博物館名称の変更

Florida State Museum の名称が 7 月 1 日より Florida Museum of Natural History と変更されました．従って同 Museum への手紙の宛先は下記のようになります:

Florida Museum of Natural History, Museum Road, University of Florida, Gainesville, FL 32611, U.S.A.

郵便番号の変更
New Postal Code

国立科学博物館分館の郵便番号が 10 月 1 日より 160 から 169 に変更になりました．従って同館への手紙の宛先は下記のようになります:

The postal (ZIP) code number for the National Science Museum (Natural History Institute), Tokyo was changed from 160 to 169, effective October 1, 1988. Accordingly, the address of the Museum should be written as follows:

〒169 新宿区百人町 3-23-1　国立科学博物館分館

National Science Museum (Natural History Institute), 3-23-1 Hyakunin-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 169, Japan

会　　記・Proceedings

昭和 63 年度第 2 回役員会

昭和 63 年 6 月 29 日 (水)，於国立科学博物館分館．出席者: 上野，落合，阿部，新井，石山，佐藤，谷内，馬場，藤田，本間，松浦，丸山．

議事: 1. 前回記録の確認．2. 報告事項．(庶務) 会費長期滞納者 21 名を退会とみなして処理した．(編集) 35 巻 2 号は 8 月後半発行の予定．手持ち原稿は 74 編．各号 16 編前後のペースで掲載している．(学術会議) 第 6 部水産学研究連絡委員会では会員として平野礼次郎，丸茂隆三両氏が推薦された．第 4 部動物科学研究連絡委員会では平本幸男氏が推薦された．3. 秋のシンポジウムについて．本会から支出する 12 万円の用途は実行委員会に一任するが，超過分については関知しない旨再確認した．4. 学会賞検討委員として，上野輝彌，落合　明，石山礼蔵，沖山宗雄，多紀保彦，谷内　透，中村守純の 7 氏を選出した．今後他の学会の資料等を集め，賞の性格等について具体的に話し合った上で実施可能かどうかを検討する．5. 特別出版物の発行について検討したが，結論に至らなかった．運営方法の具体案がまとまった段階で再審議することとした．6. 来年度の年会会場に予定されている国立科学博物館研究研修館 (新宿) の下見を実施した．7. 書籍販売店等からの会員住所録の入手希望には応じないことを申し合わせた．

昭年 63 年度第 3 回役員会

昭和 63 年 9 月 19 日 (月)，於東京水産大学．出席者: 落合，新井，石山，黒沼，佐藤，本間，松浦，丸山，野嶋 (日本学会事務センター)．

議事: 1. 前回記録の確認．2. 報告事項．(編集) 魚類学雑誌 35 巻 2 号は予定より遅れたが 9 月 20 日頃発行できる．同 3 号も間もなく印刷に入り，11 月中には発行の予定．手持ちの投稿原稿は約 60 編．(学会賞検討委員会) 会長の委嘱により落合　明氏が委員長に就任した．(庶務) 末広恭雄，檜山義夫両会員の死去にともない弔電を打った．また魚類学雑誌 35 巻 3 号に訃報を掲載するために関係者に原稿を依頼する．会費長期滞納者の処理は既に終ったが，昨年度から 2 年分を滞納している会員がかなり多くみられる．評議員会にかける前に役員等を通じて納入を呼びかけたいので，協力をお願いしたい．来年度の秋のシンポジウムについて，宮崎大学の赤崎正人氏に依頼することにした．3. カードによる会費振込について (日本学会事務センター，野嶋氏): 現在 6 社のカードが使用できる．海外からの送金の場合，3 万円以下の金額であれば手数料が小切手よりも安くなり，例え